

~ 5
5815



二品大勳位晃親王殿下御題字

月瀨紀行

平安

不識庵聽秋著

一
身



版
所
有
權

門 5
號 5615
卷

年



九月十八日

水魚位 晃親王



山階宮王 壽七十有二

山の頂、谷あり、松あり、
と、理深、那身、笑つて、
誰、梅、お、ま、し、月、の、瀬、の、
梅、も、あ、ら、ん、子、駒、の、
や

月瀬紀行序



余嘗遊大垣訪小原鍊心於其無
何者莊時方梅花盛開即設筵花
下而飲座間有一年少行酒者即席
賦詩數章奇警驚人鍊心曰是吾
家千里駒也向其名曰聽秋後不相
見十餘年錢心下世聽秋為俳諧人
一日來謁曰吾性多病遂廢學業

但放脚於山水託興於風月聊以娛
生有近著月瀨紀行乞子為序披
而閱之其辭之芳如梅花思之清
如雪月而篇章曲折之妙使人神
遊乎梅七國萬玉堆中余拍案
嘆曰有是哉奇警如是何復論
詩之俳諧哉但憾不重起鍊心相
共舉巨杯劇賞之也

明治二十年十一月如意山人谷
鐵臣撰并書于乾坤清氣樓
之南窓下



不復菴園程の事、
乃如懐子觀秋北學、
又如之、
又如之、

慕川也梅小堂、
杖の何と

曉花園集和

月瀨紀行序



不識菴主聽秋君者美濃大垣人也明治三年余在家
郷其居相近時到其邸共讀史書課餘偶得見君之詩
稿其一絕句云男兒立志何畏死五大洲中有墓田此
足以觀君之素志矣君嘗修英學于大學南校蚤欲遊
海外其期在近偶罹肺疾不果其行遂不復事學業爾
後移居西京友山水娛風月好俳諧業已為宗匠云余
也予君分手之後移住南越尋奔走東西二京之間九


年遊英國留學七年餘十七年歸留東京今年遊印度
支那歸住西京始聞君在此地其居亦不甚遠然未及
相會君已介小川果齋君索余序其月瀨紀行篇章之
妙已詳于如意山人之序余復何言抑念伯鐵心小原
大夫生平能与人交蕞洲毛苾二詩僧居常以詩酒相
交者也十數年間三人皆去世矣果齋君者蕞洲師之
第二子而余即毛苾之第三子也共離家鄉在西京復
結文字之交可不謂風流因緣乎哉乃不辭而書

明治二十年十一月三十日

碩果生南條文雄



和州の香蓮界を親しむ
梅花を説へきよ
月
平安

不識庵
聴秋


和州の香蓮界を親しむ
梅花を説へきよ
月
平安
不識庵聴秋著
聴秋

月瀬紀行軼の巻

平安 不識庵聴秋著

金子錦云 做元孫滑
舊集明治之文運意
匪更六
小川果齋云 詩語多
小原義心先生 天地
落眉 向句 為鼎立使
人想望 其風采
閑遠軒云 乾坤無住
天地我亦好一對可
謂蕉翁再生
又云 開卷第一先得
此句 想見苦唇一
片 笑待主入早四

和州の香蓮界を親しむ 非んば此生あんを梅花を説へきよ
山陽翁の芳誼の一たび吟眸を觸りより月の濛々遊んとき
ふ此思ふに年々切あはるる花朝の始に事ありて心く憂
年の星霜を過せしり今年佐樂の門生等相圖梅苑分社
を設置せんとす予が故郷を懐きしにやぬ若花並に翁
の芳跡を跡の折りに精神無任同行二人と望み樂畫せ
らば予を思へ人の生似も猿もやうかと余は猿坐の
裏に天地我廬同行夢家とかいふ予は明治丁未三月二十
五日旭日三竿萬壽小路の予庵を歩るとき
る予は予を思へ人の生似も猿もやうかと梅の花

聴秋

早云清麗

果云心目豁然先見
天地我庐 氣象

遂云自竹外句脫化來
亦覺簡明

錦云千載仰其威灵
幾千万人

述云解叙無名庵來
去太明瞭

草二六

白河橋の東より車よ一字一急うせき津陵其北隈

遥拜一独一皆の古事を慕ひ跡水工事を倫観一人
初の開けしを尋き逢坂山を越せ大津市街ハ魚鱗の
如く琵琶湖の南よ連り日枝ハ言く浮舟と重よ入り梅室翁
う富士の娘と呼せし三上山を湖の東よ矢を舎之比良ハ
湖を隔り同末よ白く蒼天よ接き

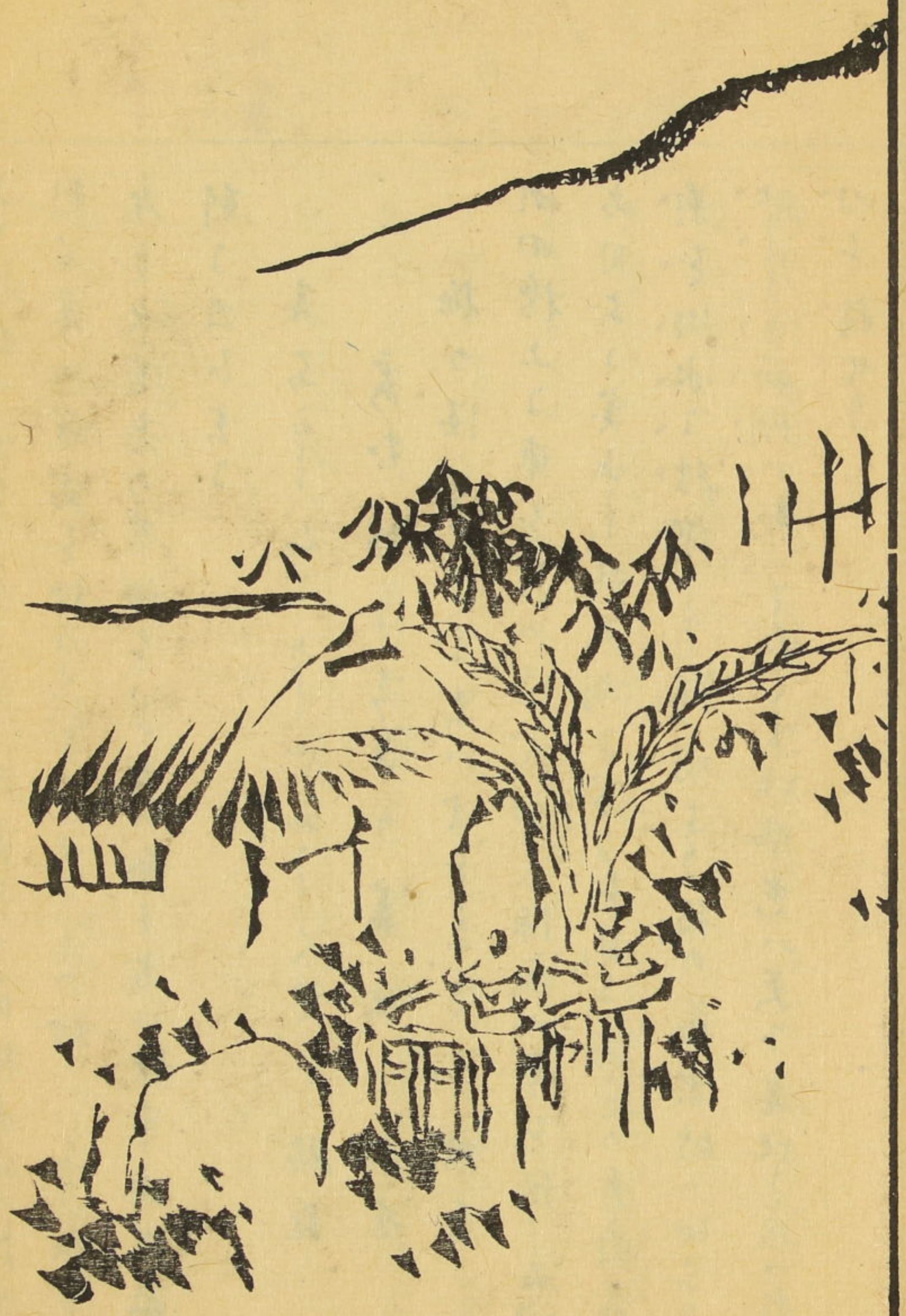
比良よとハすこしくぬりぬり水

粟津義仲寺よ至り柴門ハハせハ數十柱の芭蕉ハ芭蕉
縁よとと風よ翻り正面よ芭蕉堂あり正風宗師の額
を掛く二條右大臣の書跡あり近づきて芭蕉翁の肖像
額おきよと凛とと在り如し奉扇會より菊忌迄

ハ扇を帯携せしと世ハ比類なきの形容あり本廟
今其東よあり研の文字ハ其角の草ありとと木
常寂の墓あり後よ無名庵あり其濫觴を尋るよむじ
義仲戦没の後よ愛妻巴名和田義盛よ嫁し亡若し亂
を分脱し鎌倉を脱し自ら粟津よ其り公墓の後
よ庵を結し菩提を弔む我名を人よ明さるよと誰
云と云く無名庵と峰ハ庵の名と云ありぬとを後遷り年を經
祖翁杖をさしよ止め正秀曲架等り古き庵を補修し
翁り住しよとせり本堂よハ尚業創建風雅坊芭蕉老人
の靈位あり保せし門下十哲の靈位あり幻住庵の祀
意式三條屋ハ色紙短冊等ハ甚夥救多ありよ此様
の棟のそを築しよ安政四年六月四日の災よかり鳥有と

乞之卷

二



韓之卷

錦云追懷之情溢于
言外

遂云一句中寓無量
悲酸

あり情をよあがりあり今井道平より自極に向う松は
數百年の星霜を經るの此等よ共一途の煙のいなりぬと
庵主も若老の若松を望或ハ無と或ハ歎を慨性教
刺し及ひ去る

妻あり〜んよきくや初〜くせ

秋

雲を指よ去るの義出

松

松の徑さる〜んよきくや初〜くせ

松

淵田橋上より車を駐め紫式部より源氏の巻を綴り山
名目おし実出〜んよきくや初〜くせ
影を湖水に影倒〜んよきくや初〜くせ
比〜んよ西湖ハ都〜んよきくや初〜くせ
四を綴り

錦云春色満山水
停秋

果云雨奇晴好能料
尚前想見若兄掀髯
得意之状
又云蒼髯叟豈屑
秦皇封者哉今得
此名句應拜賜之
厚也

遂云得此一句本公
之榮有餘何啻秦皇
大夫封哉

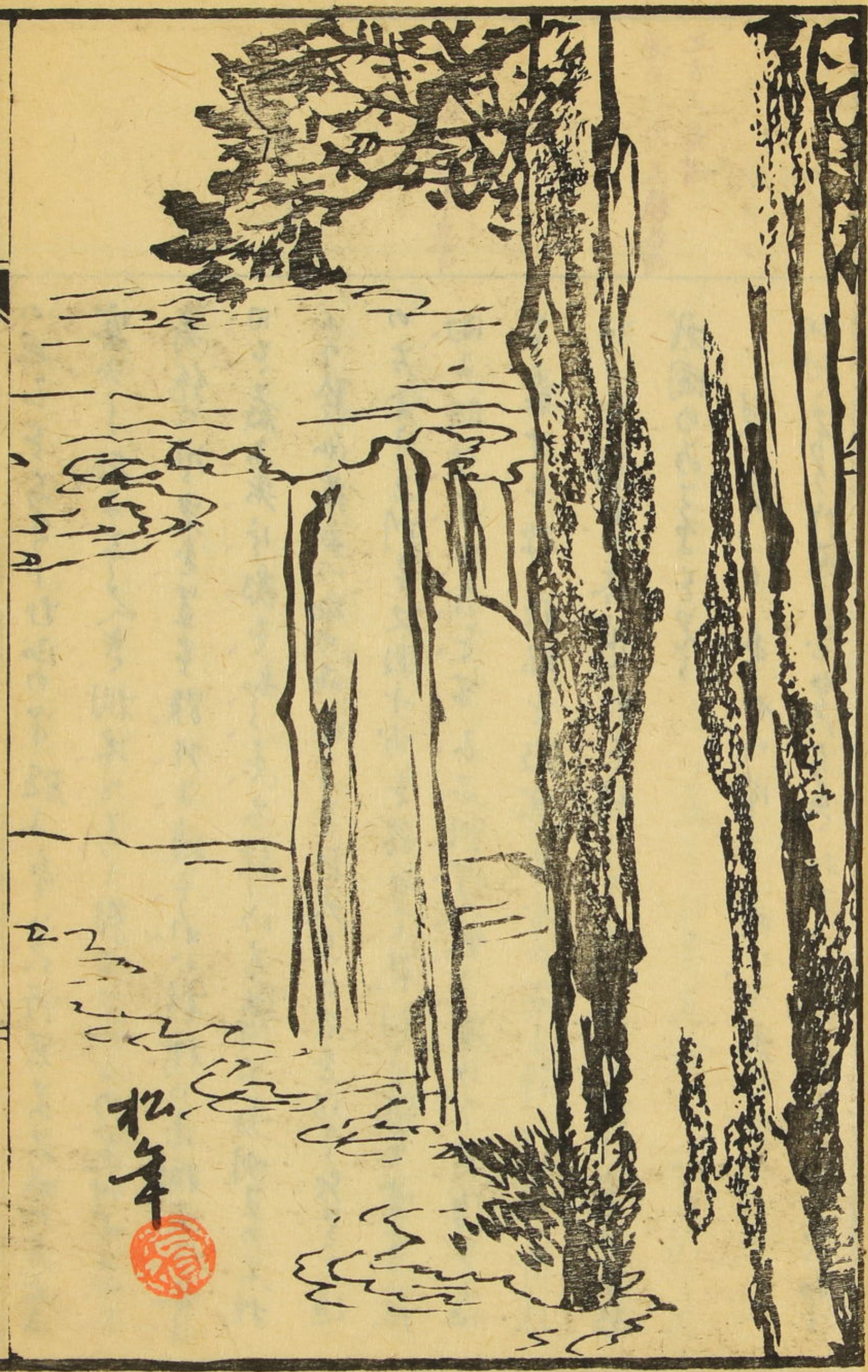
湖山の 雲あり〜んよきくや初〜くせ

旅亭秋居より此の社員山名を撰へ初文〜んよきくや初〜くせ
吸し杯を傾け畫飯を〜んよきくや初〜くせ
きみをもたぬ〜んよきくや初〜くせ
呈幹より尺の端乾〜んよきくや初〜くせ
と心を傳め〜んよきくや初〜くせ
雨降来世〜んよきくや初〜くせ
散ら大ま〜んよきくや初〜くせ
〜んよきくや初〜くせ

雲あり〜んよきくや初〜くせ

松より不動院より松あり〜んよきくや初〜くせ
〜んよきくや初〜くせ

乾
之
卷

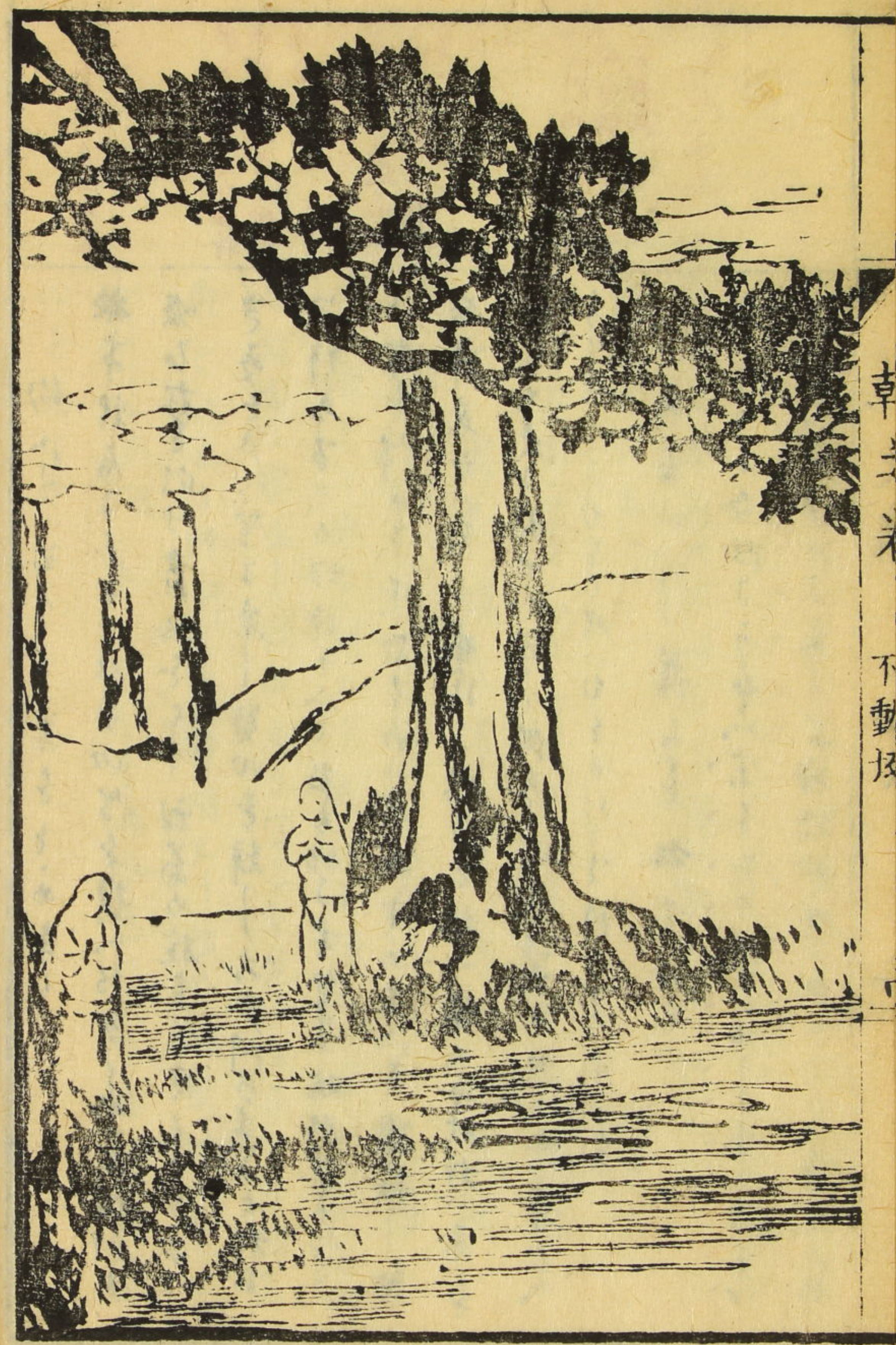


松年



韓
之
卷

不
動
居



錦云遊于能宗最可
遂云一句天籟益得
之古人意者

の思ふをまきしむ山の末版よを其の怪念ある所の左右に
実か一松よあふ人き樹木もよく頼よまの芝竹もよく
青龍の風光を呈せ給りて遊まれば松檜の老樹天よ奉
日を敷ふ若くは穀を知りて古神の本尊不動明王の石柱
あり於伽羅刹の迦の西童子を巨大なる石を以て築きて道
の左右に立列せ又數十歩を移せば梵刹に遊ま堂宇は凡
雨に晒せり古を帯ふ石は人跡よ磨けり新涼を涼
を囊中を存す時服を設賽り今や古よ神道あり佛法
あり聖教あり各彼ら経を破りて已ら長を誇り享よ家教
我國のみよまをまを

そのころくを其の甲一峰の花

畑村より作原よまは古き社あり仙神を祭りて其の

果云僅々十七言也
括深山幽谷阪路半
曉之状何等筆力

錦云遊于能宗最可

又云羨行憾止句意
要當

さ世も紀氏う塔通明神の古をありし習を下りて拜き
小川を越へ黄昏多む野尾の村端にわが社員燈を照し迎へ
て道の初へを歩り千秋庵に着て社員月會一杯を依け若
よ名事を祝す

初りのころをその州や其のる 豊名

定うせりし世もかけぬ松北を 聴松

二十六日晴社員豊名につきあふは依り男古月子六父子代
り月の影観松の随行を

ふのこ 松よ若よの松えの那 空名

多羅尾村を辭し於鬼岐阪八十八丁のりりて一歩も歩
みも帰途の苦辛を思ふせりて岩壁を登りて松檜石四凸路
の左右に列し城郭の豊石よまをくく長松を峰より松よ

又云慷慨凜乎

果云凄愴

遂云一謀之下已知極
漢在也

又云斬新

錦云遇儉破夢之什
可拘踰難昇夢之旁
可憐

連り、羽の飛ぶ、つるを、蘇波の起る、つる、若大友の玉
り、吉野の軍を、防ぎ、終り、阪より、と、里人の、語る、を、多、ほ、め、り
を、追、懐、く、無、情、止、む

袖—る、ねの、言、や、事、さ—

西、山、の、里、より、西、村、を、過、き、小、川、の、磯、より、多、く、金、鳥、の、南、天、
よ、かり、東、風、解、き、を、い、ふ、れ、黄、鶴、を、玉、を、吐、き、梅、香、を、動、し、
竹、葉、の、い、す、み、見、ぬ、月、の、夢、を、乗、せ、り、鞍、車、中、に、何、山、の、
運、も、

若、き、よ、より、あ、く、あ、く、を、等、り、竹、葉、の、磯、

胎、秋

梅、又、あ、く、り、り、運、も、あ、く、柳、

雪、月

ら、中、仲、阿、友、生、忍、み、飯、を、喫、し、柴、田、茶、屋、郎、の、通、遊、を、人、
杉、系、の、匂、色、なる、を、以、り、月、の、影、は、同、伴、も、朝、具、大、枝、白、樺、等、

逸云極力描写形勢
始如目觀之就中銀
世界中水晶漢七字
能写其真

錦云暗下亦義人來
是別世界

の、数、村、を、過、り、石、打、村、に、至、せ、り、夕、陽、西、山、に、春、く、尾、山、の、梅、
林、を、明、日、に、残、り、り、村、を、より、長、引、よ、り、ん、と、を、れ、る、風、
ハ、清、香、を、送、り、り、梅、舟、の、迹、は、あ、く、を、指、し、晚、鐘、ハ、響、長、し、
了、山、寺、の、流、し、は、清、き、を、を、知、る、美、香、一、月、子、不、り、梅、林、に、
遠、ま、れ、八、千、樹、葉、花、雪、の、や、く、小、園、き、新、月、の、山、岳、を、照、る、り、
と、轉、じ、銀、玉、界、中、水、晶、漢、と、云、く、梅、樹、の、外、も、眼、界、よ、り、
不、く、その、あ、く、つ、雨、の、後、水、ハ、梅、香、を、漂、ふ、を、清、潔、掬、む、り、
由、小、告、ま、る、牛、を、繫、み、耳、を、洗、ふ、り、和、語、子、知、さ、り、語、を、推、
て、唇、を、紅、を、唇、し、

音、響、の、物、よ、う、等、り、梅、林、

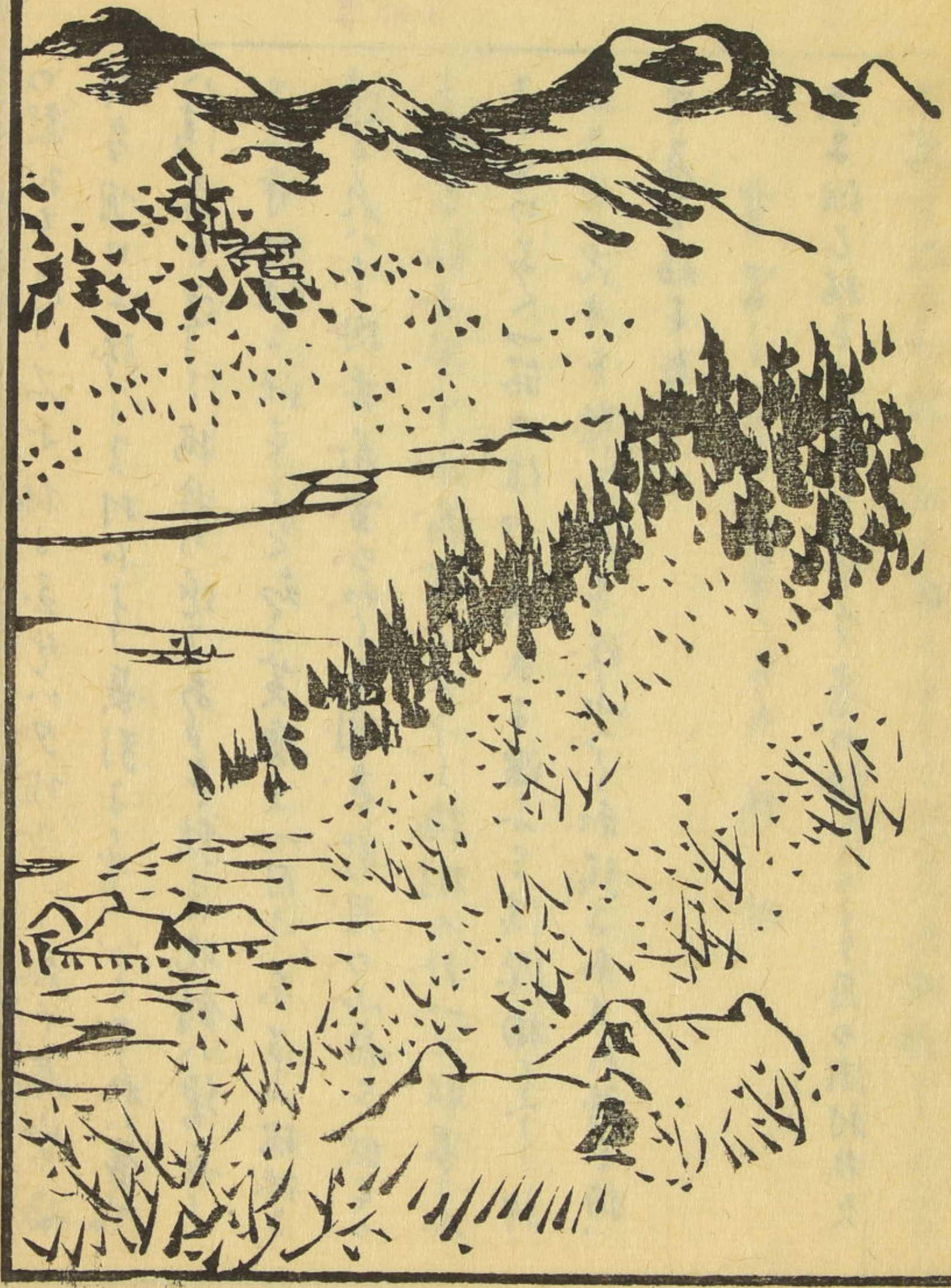
深、く、浴、び、梅、を、迎、へ、梅、を、送、り、り、雪、の、涙、を、そ、り、り、月、の、影、村、林、久、
小、霜、を、投、ぎ、る、虎、厨、の、迹、を、患、ふ、事、を、り、旅、客、元、満、梅、子、由、り、

乾
之
卷

久保田米僊先生



月一涿
米一涿
伊一涿



朝
之
卷

月
之
涿

果云是亦天地我序
之意
又云非解禪理者不
能不作此句又不能
知此中味也

遂云奇警之悟
又云真情真句

錦云有此什而梅溪
之乾坤特所謂動天
之謂乎

遂云誦者亦意動神
罪罪如身在其中

一室の半を借る橋とる一室の露を似け
不友の來會を待
つと玉らまほき波あくるは眠る夢よ
天地の横きを怯る
夢をば玉のひらきをわす

せうくくもちぬい意一梅の宿

二十七日晴晴晴早起窓を開き夜の
四るを待つ

梅のやういふくも夜の志くくりの

梅溪ハ十三ヶ村ありも梅林の多き
い尾山長引を以て第一
とや月雨松香野嵩を以て之より
亞く然せとも梅溪の全
真を昭累はぬく月
の瀬を以て第一
とや夜ハ不のくく
明なり遠近をよ
白雪の起るく
又く梅花あり
四品の梅
其雪の融ふく
又く梅を
さる景吟
眸小
収め
天地肩
向ふ
風光
法鏡
純潔の
姿を
まよ
非也

果云梅之与雪月雪
得逼真拙堂記
殊不得擅裁於前

遂云暗承閑卷第一
句意自然相應

雪あは白はさうくくをのり梅

朝炊を済し梅香野よる是れ一住先ゆく
とや友竹延門
のま月雨記りのぬ
梅ハ二旁より別峰
峰より
然く連る深
ハ割子階郎の遊樂宮
と共二千の住人
と遠く
新を考
仰くくく
風光を以て
又く世ハ余
鳥蛇足の
草を
省きぬ
再月雨よ
交り山の半
腹を下らん
とそれハ
計らまも
散園御
士君
白老竹塘
ぬ舟の
雨子を
携へ
来り
と
遠近を

先述より同くんぬ
梅の宿 脇舟

野告る友を
梅香 奉 君白

云くく
神を
あち
名張川の岸
より
舟を
まよ
水原
湖
らん
と
それハ
詠ある
壯士
あり
首を
回し
足踏
ハ
松あり
師の
まを
梅あり
より
志望けり
相友

心のきまぬ友を伴へ旅 船社

後々事々る者ハ大和の御士目水老あり共ニ舟上乗一海
ふらふ水邊に遊り兩岸の松を其ノ下御蔭一舟ハ松を
花よみ振りや怪石癭岩出沒左岩坪若新石ありは海
月の印より影の蔽さるる以て月の瀬名あり今ハ酒
より一村の名もなきぬ舟を松も枯下ニ登き飯を喫き
る者あり看を食ふ者あり海を看る者あり句を吐く者あり
心を清くするぬ友を伴ひて風流の流るる也く各佳境
ふか舟を流し任し不憚然と古楚はは感ありは松木
一葉山はは縁ありは松木一葉堂前草を食ふて舟
一も今も船界の興りぬ遊りより笠置山の産松を吊り物
らんと思つるも社設置式の清よるれば未信は留まらぬ

錦云拾遺奪名堂唐月瀬而已
遂云真個別仙境光景

果云其然豈其然乎

果云余今春港月瀬
歸途吊笠置古跡而
遂無一句老兄則遂
拜有此佳作吟了悃
惓考人之

遂云仙界化為俗境
同一梅花也而轉瞬
間異其觀如此花神
有靈則應一滴暗淚
以訴其俗了

錦云文明之殺風景

只彼の方を遥拜して

いさゝかふらぬ笠置の山もめづるは
うらうらとまうふま ぢうとこりぬ

雲の海濱より舟を走らせ長引の山路より松樹を小
橋より舟を躡き葉子を葉の家高きより舟上己の首
句を高き遊女の鞆帯をるんとし群鳥を獲り其る里あり
里は梅屋を穿んとし秦楚の道を遠しとて松を愛雅
士あり娘を獲りて梅を争ふ高即あり酒興よ花
を松を舟子の暴風雨を知らず辨葉あり花制の礼
舟上つるふらむ時日の西境に思ふ一松林もよふ市街の如く
舟集りて尾山より舟を回し見ると月の瀬菫の松林は遠
く隔るる白雲の岫を此の如く其舟に埋るる斜陽の光

錦云這是風雅之殺風景

遂云惡吟粗句之纏
梅花俗了極參吾如
花神整眉憾其惡
因緣

を失ふこと思ふれり梅武より身りて小憩を梅樹の屋
垣擁り前面流り連り水香ハ梅香ハ浮沈を庭前の梅
枝より秀吟粗句の別あり結むる色紙短冊ハ重なる
七夕の年のめく詩家ハ訪ふハ通るへくは歌人の歌もハ
去る屋もハ俳士ハ句もハ動へくも云ぬりて梅香
韻都りて行人ハ遍れ余を連日の梅香ハ破ら吟情の
起らざる河の本も吟ハ嘆す梅の花ハ蒼北翁の遺吟
を紙の紙を裂き木葉を河ハ梅樹ハ物ハぬは村ハ
三学院ハ梅ハ梵州あり若山陽翁ハ水ハ梅を留めらる
雲ハ今尚存せり云ハ晚鐘ハ梅香ハ情ハ返むあれハ
心掛ハ尾山を辞去石少より車を懸け夜ハ今友志
ハ帰り若白者ハ同宿を

其小魚を起り梅又の相御り 若白

之也いさうけ、身れ月 新 船秋

該あり、秘苑も、菴菴翁其角庵雪等の遺墨を屏
掛けぬ作袖ハ着を巻一 羽衣ヲ携帯も、空の水晶の
香爐ハ名色を点一 拜一 是を見り津田子余の門ハ入
名を乞ふ子ハ酒の碑のさわら月も、夢中ハ梅溪を乞ふ
のみは梅を以て梅香ハ名つけず人ぬ
二十八日晴 祖翁の齋趾ハ誘引せんハ梅香來せら若白者
ハ袖をちち表虫屋ハ多ハ上堂市街の南極ハ
日向町ハ連接も若祖翁ハ庵の閑静も、愛ハ菴虫の
音をきくハ其ハ雪の庵の吟あり今ハ庵の名ハ、
うほ玉若ハ、水ハ住ハ、も、愛選ハ今ハ中村桑の伝



蒼石遺蹟
 蒼虫居之圖為
 陸秋光筆
 新居有山居七
 癸卯



遂云冷熱易地雅俗
顛倒河謂桑海之變
不啻也一嘆
果云用蕉翁放翁二
典信手拈来自成妙
文感服

錦云俳風衰態可想
否其道熱中者之所
為乎呵々
又云蕞虫之什果可
括祖翁之矣

有る屋一有端思虫のふよ出屋おの生恒敷歩を隔つれハ
此屋敷と峰ふ遊廊あり三弦ハたえき耳を貫き紅襖ハ剛
く眼ハ觸せ若閑寂の庵ハ今ハ歌吹海邊の庵とあり
蕞虫の音を穿て或る仙人ハ夜雨を知りて歌はるるの
詩亦も亦く言ふ入り床柱を足せハ割取らる路あり怪て
庵まは問ふあぢ蕞虫の遺骨を祖翁と素然とれくハ是の
指もも安政己の冬枯のちち何者り割り取去らる決せり
嗚呼惜むへく是くハ祖翁り神靈の所為とんりハ且歌
且笑ハ庵こゝ祖翁自植のちあり二百有餘年の毒秋を經
る霜雪ハ政芳ささの海も亦く千尋の直斜ハ三冬も縁
よも一畝の濃陰を六月も穿りて思ひは死ハ見りて此
おちせんと元禄の昔を追思ももも嫌はるるを

何ぞやうい物の一のやうに木の風

蕞虫よ問くん 芳月よむ

演劇より唱采を得る伊賀越後警の要るを稱し
んと鍵家の辻はまはるは奈衣袂道よりハ工部市柳
の西の入口より若備前後の臣渡逐敷馬の牙小文治の雄川
今又その序を打んとて助太刀蕞虫又右奥の僕川合武右
老門表孫右奥の四人ハ鍵家の辻は本望を達しぬ実ハ
寛永十一年十一月七日早天ハありき孫右老門武右老ハ
深子を更け終は治世を武右奥を念佛する蕞虫今尚石
解あり天心道秀信士ハ其を忠死し孫右奥の墓ハ
見えざるや知れ仇とる又其郎の墓ハ萬福寺ハ存在せ
聖若より若父の讒言を報せ一忠臣孝子ハ多々せしも蕞

錦云有雅趣有活歴
史此篇不可不読

累云余不解俳句然
読君諸製覚有神韻
縹緲之致則詩俳一
其揆可知也

錦云懐冷

の能を披せし最めくきききありて後改郷塚を吊ハ
んと愛深町の愛深院より多る竹林の片隅に在る若む
しと解あり若むを掃てて楊柳の蒼蒼意態極着法味
大字の刻しあり是中一祖菊の塚ありと香花をて向
敬拜時をうつりて去りぬ

ふお打撃のまゝ一木の

上野公園より多る公園を孫堂家の意疎郭あり若翁村
順慶の築くまゝに壯宏の石畳の千仞の岩壁の如く外濠
名中下よ流し流し流しと深き百尺是を望めれば競
くくくし肌膚は粟粒を生も東北の樹木森々として天
奈一天主臺の巍々として雲よみりて見せし村境岐
阪の折れ登りぬく青く北川の流ハ常の如く白く多岐の村

錦云頌声併悲想

落ハ眼下の多る防禦屈竟りて千軍を廻り万馬をこへ
ぬりしと心きく落しはおもひて今も
やま委ね公園より多る無名の結さるる今も彼の諫鼓若
むしと新おとらきき今も森やも咽泣の今日服界は遍
りぬ又多る壯年のさる位も今も一層散り今も田畑と赤
了袖柳の折れ枯せり竹小ありき世の愛深は二十年の星
霜よ生位あり異滅ありと也

兼平よ落しと味やふまゝとせ 形奴

二十九日晴小田村より騎着森元章氏より招きて傍竹吾廬と
呼ぶ別亭あり窓を屏き見せし先ハ天主臺と相似て兼
親飯あり先揚州の酒勢海の魚を以て饗宴を一杯ハ人海を
看と二杯ハ海海を看の期より多る深意よ高くと思はれと

遂云与月漸之未也
玉骨其賞心如何

錦云醉此佳人醉彼
佳人深與可想

遂云亦一奇亦一笑

果云此一段全自趙
師雄脫胎來殆有出
藍之妙

嬾妮くも合嬾来る奥を恥く安ハ春月の柳に如く媚て
秋水の蓮に似たり酒杯の秋影冥萬の折る時一層の侍ハ
ふくも書白に思ふとさう強欲ふと終に酒人を吞む事
玉山の例も知れず梅夢寝る泉中に猶倒れ被割玄名
うねる醒るはぬ梅夢の解ハ余水は流るる合嬾の夢動
只あつとを領こり梅夢まへに同く笑つ答ふ被ハ
当地の罪始ふ此と酒醒る海意の合嬾く多き時是を
知覺するもあまハ余く破曉迄酒を吞む事余の如
き酒を吞むるも然も是を悟らるる八月の願觀梅の解は
赤く破るるあんく大笑する事
其夜の末本松樹を余り霜霜を掃む各月漸きて得る如
の句を以て梅夢に夢の仙詩を始を黙生此吟或或我

晴々爽子あつとさうも難きを過せんとあつとあつと

あつと破るるぬさのあつと梅の報世界 胎秋

梅うさ也梅長引の風さあつと 司水

あつとあつとあつとあつとあつとあつと 古月

梅うさよ引をさつとあつとあつとあつと 杉樹

うねるあつとあつとあつとあつとあつと 杉古

梅うさよあつとあつとあつとあつとあつと 梅古

はあ春ハ別ハ梅木ハ鑄くめんも思ふあれハ羨句の事さう

三十日晴日水招友の雨子ハ初瀬ハ悔んく別賦をむ

踏む事さうさ右中や別 雲 司水

名跡さうさうさあつとあつとあつと 胎秋

日暮信樂子秋危ハ戻り社員来會ハ杯を酌る八月漸

梅舟の法統を記さるるを拭し祖傳古蹟の愛護を
話して夜の更にもあつたりき

三十一日兩日病床にありあつたり耳目小弱し書を借
記さんと草を取らるるもくく道の死るふも記氏長
明阿佛尼の文を讀む情を告しより皆其精神を改
る能く昔舊編も云せしるぬ況や月津の八世書
滿腹文學の力を以て振つて記録あり月津の梅舟
を編の文章と題し編の文章八月津記録を以て
余の如く淺學短才の書を書き非されハ勤る文章を
借らるる言語を頼りて暇日の兩今日も晴れ山彼を
川と只耳目の弱しる書を草に任を記さんと世も
病書に依りて途々筆を抛ち寝て眠り

果云猶詩以咏梅花
者無不步林高後塵
也

又云是之謂真紀行
又云老兄亦學莊周
也

ハ情とありて益載の多し就中或ハ情と兼りて月の
書裏に起し肉作の及ぶる快楽を多せり千秋原に余
病体の法然を記す

只さるるも此山里をくくり 月 聴ね
草とて 夢とて 梅とて 聴ね

四月一日雨病の快くさるるより聴ね及母文と書等の
看漢を得る病を善く聴出京都より雨を冒して
本社没軍の準備を誤る夜に入り語らるる眠りふく
眠り

逸云此中寓諷刺意
存之亦可今附抹殺
何也

果云此夢是何夢哉
蝶賦花耶將乘鵬游
月宮耶惜墨塗林殺
不能知之也

松一枝の清香も墨もあらず
 神燈明滅枕頭も消燼り瓶
 二日兩早天社負ハ杉月古の野中の清香も此は墨も茶石
 を携来せしあれを服を本後夷西の味もつて痛もふ快念
 の思あをハ属する一変の物を揮毫されとも幸なり 智一承り 癡

果云三四唐音
又云開非翁杜甫集
与西行集常携之君
亦知非漫然作詩者
用意之深可以見矣

此葉も情の味も病中の拙劣只責を防くのこゝ或ハ詩歌をこ
 とふ若あしとせやう中道ハ知るまじく固く辨せしむ事
 彼地より思ふに思ふに思ふにかいつ帯るやうぬ
 宿望十年遊月漸尋春旬日洗吟猶滿山松樹向於雪
 銀玉界中人散香
 月の清此もなるく、あ、ぬぬも玉の
 雲夜もあききう 笑の下路
 玉の山にあふくも梅阿りこ
 吹まて風の初せぬるあめ
 今夜任来の個人松下孫柳枝社負とある吟孫公務の金
 味あくくくも雨を衝く 神をみる
 三日晴祖翁首像を床に坐り海山の味を供 社負来

會分社設墨武を行ふ次は仰社よりりぬ

是のの昔新見をよ葉根分

めくこ深くく交る真 百

飛ふ乙香くくまの望の涙うそ

月つふ若の藤の長引

名月を望く芽のふくつあり

生壁 菊の楼 の 秋

立寄 歌よむ縁よ東の晴城

あらくく飲く酒の泪のあり

志のふ望く髪をよ伴く有るま

吾理を秋ハ神ハ横む

竹橋の露ハ木の葉の青をかり

雲のやあしん月 霞ふ雲

牡丹真をあつる目ハ玉 蓮

秋 秋

冬 辰

竹 虎

冬 辰

秋 秋

秋 秋

秋 秋

秋 秋

秋 秋

秋 秋

秋 秋

秋 秋

秋 秋

軍くぬくを身振るま

若者よ大臺垣をくり 起る世

梁よいしみの扇 踊る

聞き及る菊の華くあうけ

吾れくくあうくく 麗ふあ

仰社終る時露く借る垣の五万句集の巻を聞

四日結啼胎虫早く起き雨戸をしくく其の庭あよ白雪の

降降りくくよ菊き住葉ありく報むる鮮よ忽曇る

め臥依のうちより首を回く

美くくくくく 降 埋む深きうれ

四代右多羅尾氏より招き交るよいつき有を以て解を

面くくを以て迎ふ厚志を謝く是よ無くくく 孫貴近

御家の支吾くくく 諸侯より馳せり 家系あり床よ豊臣

大園の多羅尾氏の祖先へあつた時一処の種母あれはなす記を

ふりめやまよきよあつたの吹くきや

たりあつた清を雪くつるん 秀吉

傍に半弓あり後川家康公大坂陣に携帶せらるる後
多羅尾氏の祖先に傳りてあつた品あつたをわする事よ神有と
る品を視を得るの幸福と云へ

梅うき雪くつるあを片在松 ぬ梅女

園む妙表よ志ぬ 春空 胎妹

香爐峰の麓よ比まへき家を聞くと女あり玉樹の祥を
呈し僅山の瑞を歎け仙家味をあらうと凡事を終り
基氏の庖丁を抛け舎をさへし杯を把り風光を賞し
醉よあつた傲句を吐く梅の乱れんとし梅も紐を解んとす

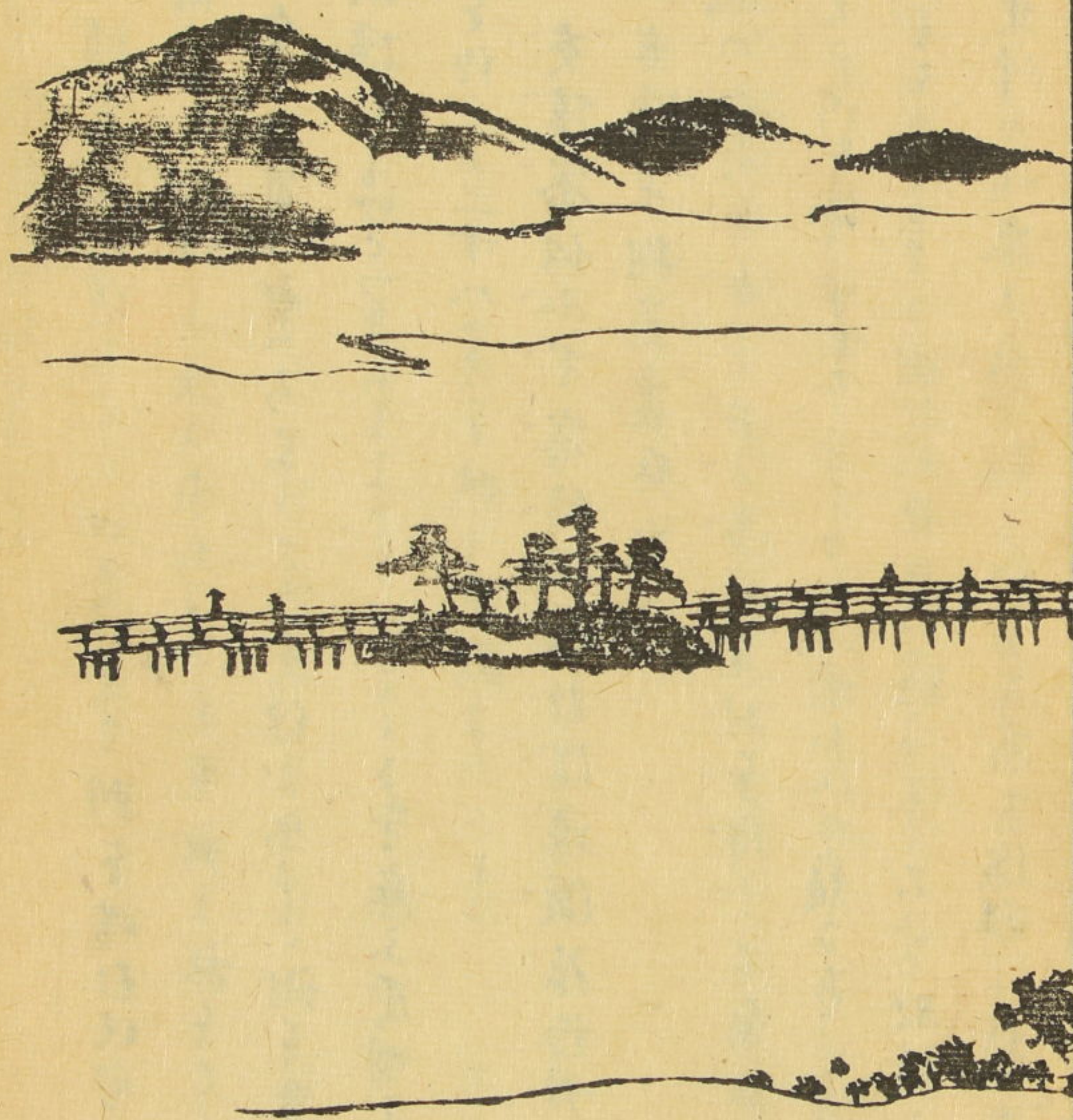
遂云是亦一奇觀其
得意可知

果云天呈奇景似助
君餘與者

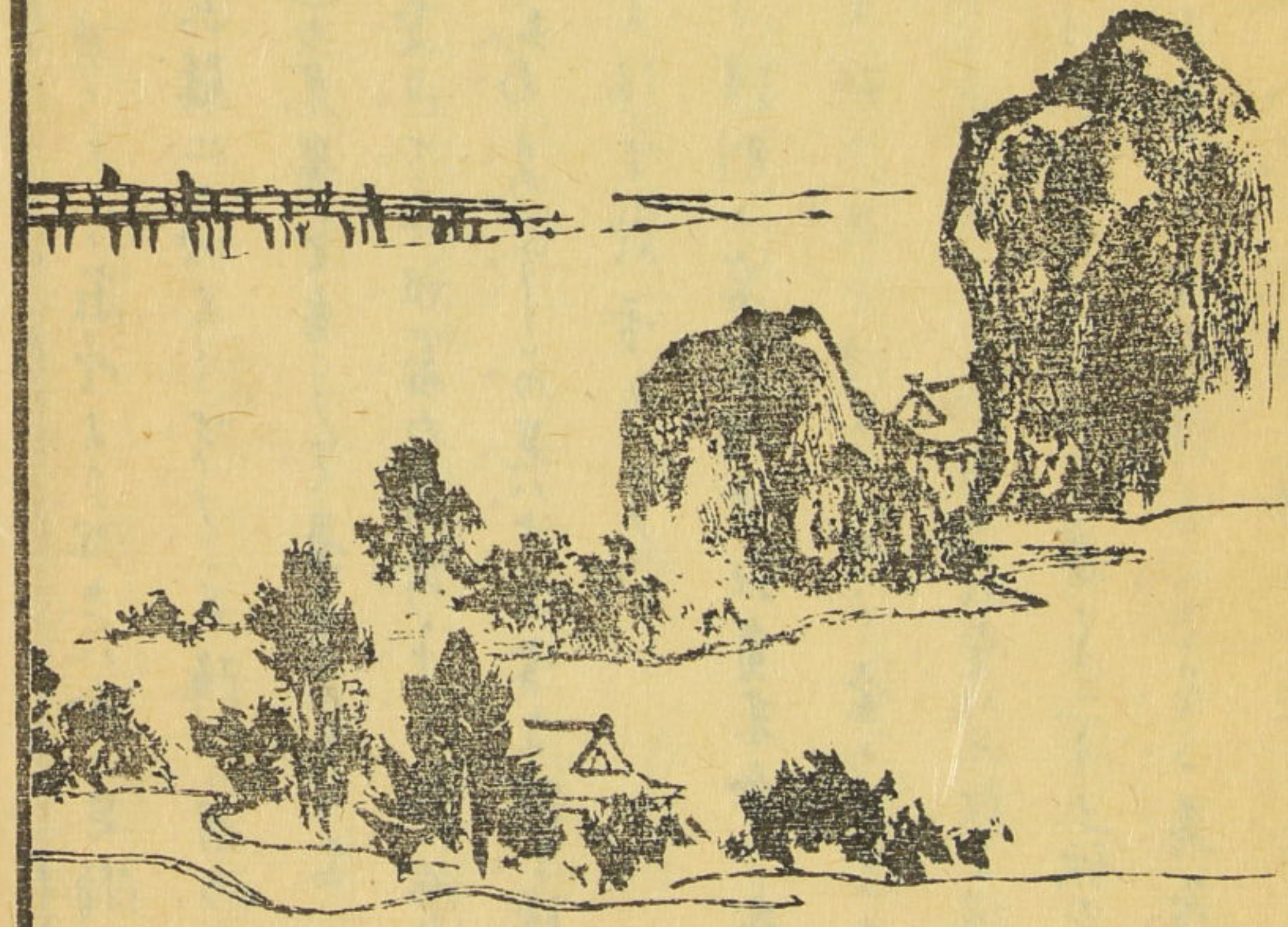
又云用紀氏土佐日
記文取東有力

ふ春和駱陽の暇日よ憂り大雪をふり深き八余り日瀬梅
溪に沈溺しるを膝に墜二り時ふさふさ天降し月の澗
梅溪の銀虫界と冬の光景を争うて是を見まらふと
あつたらハ雪よ結ふ交点てふ祖翁の遺言より帰路に
倒る省を一字よも知ぬあつた是ハ十文字よ結し梅ぬ
あつたゆのちをよふ生れ雪のうへ

五日す候子秋庵に於て送別の宴を開き社負東會し且酌
且漢を極林の秋砒ハ甲越の兵を供りて疾く金の前よ東
其の遊庵の面壁よ灼くしと動のちを聴松の北堂ハ三弦よ堪ふ
呈妻女の琵琶を精し六段より一曲を奏せし二十五弦の夜
月ありぬもは妙技法を多々今也悔らんしとす春屋も
廻をとりめんとす及や人間の湯宴よ清言を以て恥くは



百八

河人の陶然と大跡をせん

六日晴余を見送らんと社員の事を別を惜む此旬日の清遊
は俗墓を洗除し一京の家あまも忘形新の旅を去るの思を
る千金社負のあきらまざる交遊の出ると謝を豊後八月
の瀬随折もいつきあるよより果さくを患ふ更咽真の芳性
初を約し二十八字を賦しし贈る

交情密似山雲密跡恨深於海浪深縁約明年遊

吉野木朝花裏爽吟心

朝敷の山影を去ると共よ多羅尾村を辞し不動阪の嶮を
越へ大戸川を渡り里村を去り夕陽の國を山の嶺にありて瀬田橋畔
を照玉をえて去り樂む三井寺の遠く石山の晚鐘を送ら
る愛津の晴嵐よ衣を翻し担荷布衣を遙釋し新の忠告をは

果云真率有味

錦云觀梅不飽梅見
月慾更覺風流之真

果云端城亦應喜君
風流不啻花神也

あゝ芳もあゝ黄昏遠阪の真跡山斜の里を打過き日の影を月
よ越へ家玉座のせんし路傍の梅影よ追つきて
おのりあがりて月よをを引く燈梅か

高歩駝虫を伴て庵よ帰る時よ舞頂山秋の風よ
かゝるをよ初更を指しぬ

梅のまはれ	庵まはれ	近うは	旅あはれ	聴秋
中ぬもぬ	よ更を	あいの夜	素更か	
葉の戸を	ひら	けり	もりの風	芽粟
只梅のまはれ	あゝ	耳を	去る	駝虫

丁亥十月如意山人安批

此一篇所主乃在觀梅故中間極力寓其乎神寫其風采描其韻致描其雅趣將梅花真體自在翻弄殆無餘蕩一讀之下覺字々皆香時丁亥之冬十二月於皆夢樓上觀梅微笑之處遂軒散史安批多罪

聽秋老兄與余先人大夢有舊一日余隨谷如意翁過其東山不識庵聞有目瀨紀行上梓之舉心大驕之翌若兄袖此卷來過余廬使余強評之父執之請不得辭乃付一二評語於欄外還之余於俳句固為門外漢請裁取焉若夫老兄之才之興技則如意翁序文已悉之矣
明治丁亥冬月
辱知 果齋小川泰拜識

月瀨紀行朝之卷終

いづつかよひの
なごころ
梅の
香

梅の月と二つよ

梅の柳の香

梅は雪のちちと
梅の香

客主 備系うさ
日と 棋 雀 彦

水琴 晴嵐

松の枝は雪を
し 散れし 梅の

下総 羽后 但馬 越后 豊后 函館

梅は月夜に
おん
のさそふ
耕雨

志らぬの白く

うこく
柳

梅白し月を
夜は
月主

舟は行
梅の花難

月を
梅の花

歩月
淇園

吉

梅の花

草分
七修松

予
梅

香ま
梅

増
梅

梅
静快

一
静快

函館 越前 能登 西京 函館 周防

翠のりくの江戸

とやうも邪正の枝をし梅の花 可然

物とさしつるう月とさしつるう

梅とさしつるう梅とさしつるう 桃とさしつるう

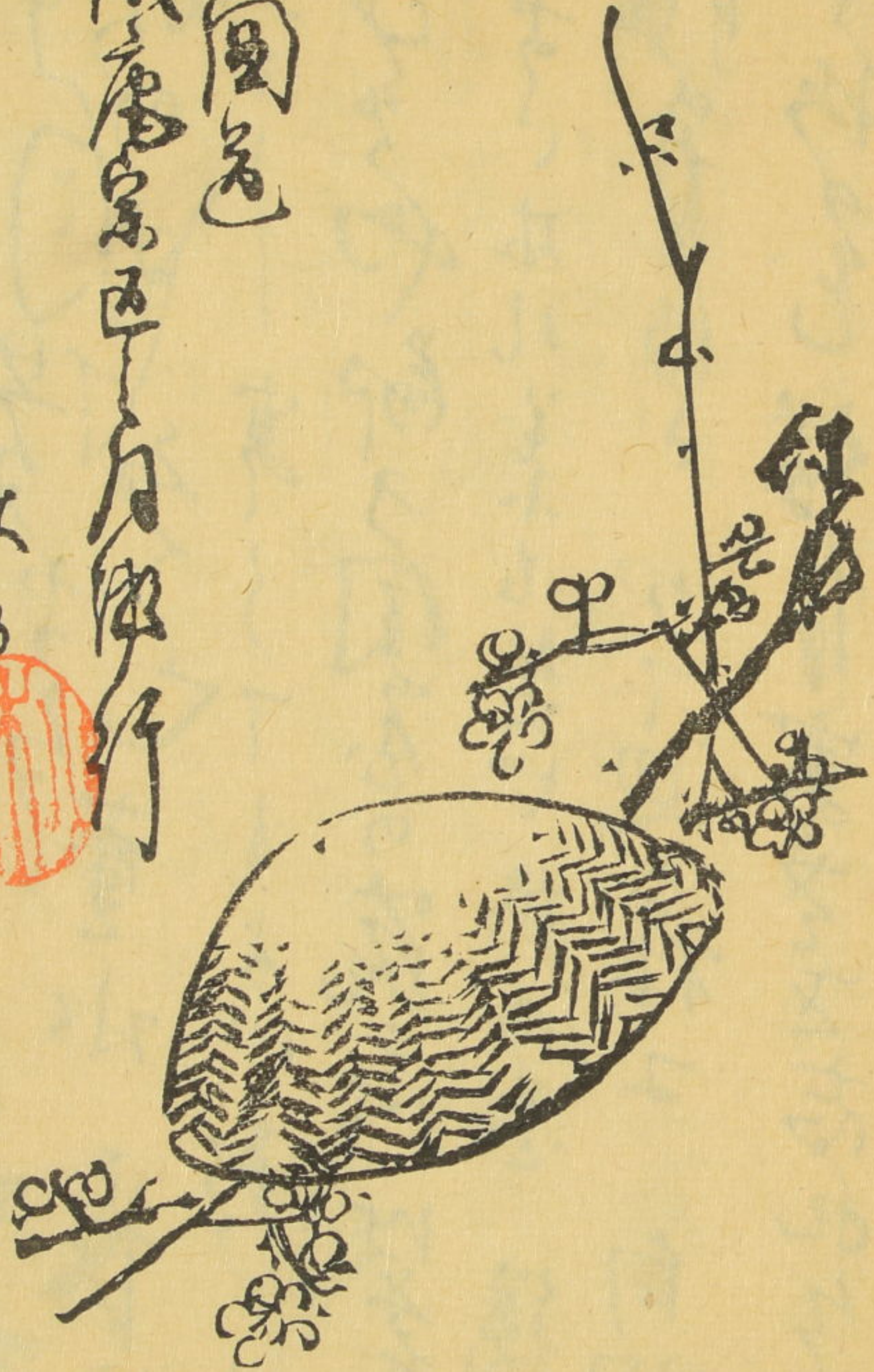
梅とさしつるう梅とさしつるう 梅とさしつるう

梅とさしつるう梅とさしつるう 梅とさしつるう

寫世園名

新橋宿

秋



折る枝 氷地 橋
梅の 白 借り 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢

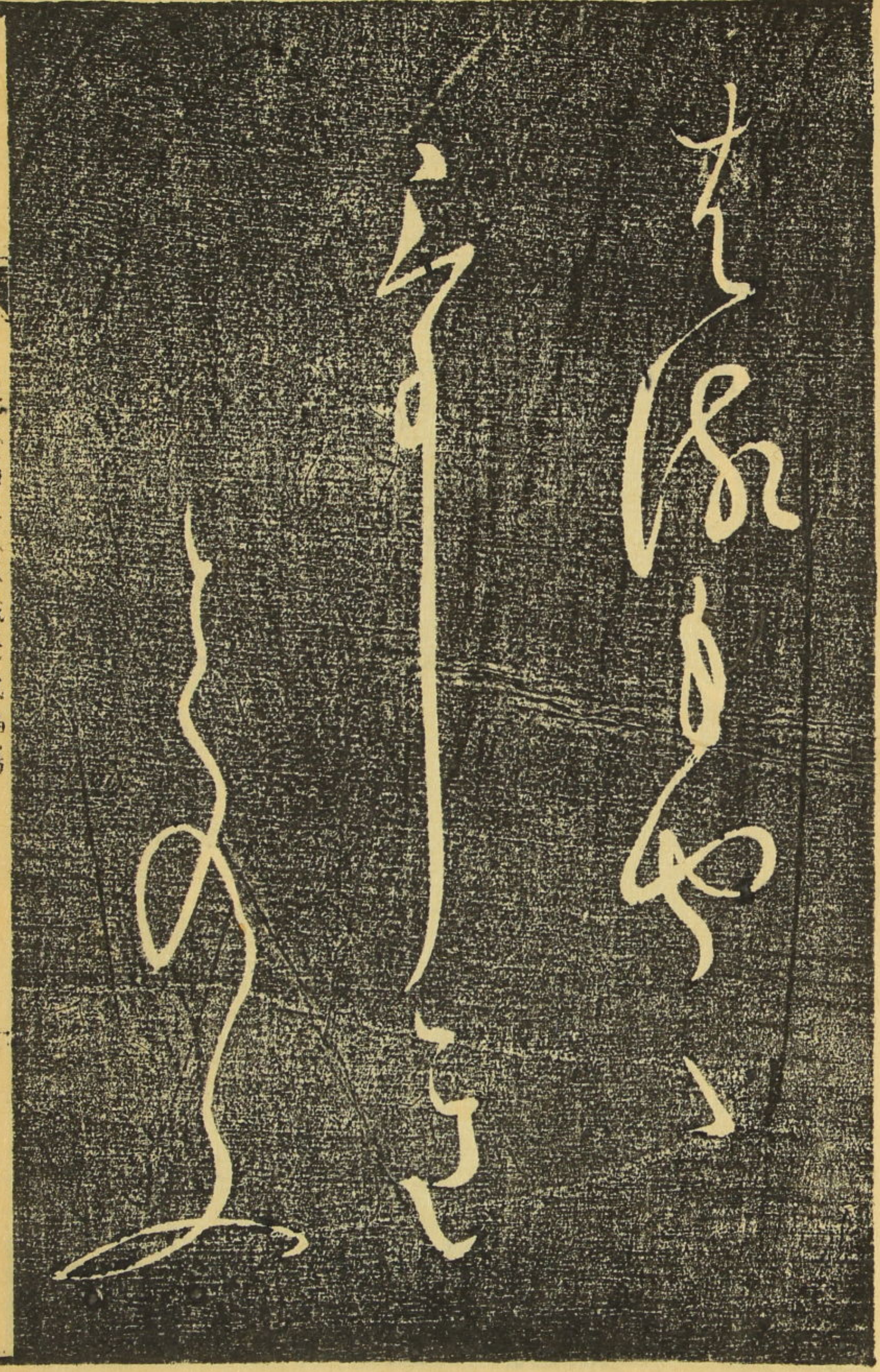
里 梅の 夢 夢 夢 夢
折る 枝の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢
梅の 夢 夢 夢 夢

小樽 山城 遠江 羽后 紀伊 能登

ふりかへも 煙をぬく 梅の
はる 月の光る かな
徳

梅のこも 梅の
月ヶ原の 梅を 梅の
年の 梅の 梅の
梅の 梅の 梅の
梅の 梅の 梅の

梅のこも 梅の
梅のこも 梅の
梅のこも 梅の
梅のこも 梅の
梅のこも 梅の



此蕉病真跡不識庵藏幅寫

月
梅

た
し
ん
ん
ん

月瀬記行沖の巻

平安 不識庵聽秋選

觀梅余興

梅のこゝろは 秋のころに 花をまきし
 此の梅も 牛も 妙なる 物まじり
 山に あり 万葉 なく 一のめり
 望のふり 梅あり せき 牛の
 梅の 香も 木の けり 出の けり
 あり けり 枝の さけり 梅の
 香の 咲けり 木を けり けり
 けり 梅の 脈や けり けり
 香の 口を けり けり けり
 梅の 目も 立す 正の 月
 梅の 香も やす 煙を けり
 立す 梅の 香も やす 煙を けり
 梅の 香も やす 煙を けり
 うめ 咲 や いの つの けり
 梅の 香も やす 煙を けり

芭蕉 其角 支考 政通 去來 深雅 会經 龜屋 野崎 桃崎

申之巻

觀梅余興

一

のしるふと伴に散るけうめはむ
梅り多や分る里ハ牛の角
定著一とありしきや梅時茶
十八町 桑子 里 ありう免のむ
呀くくも 覚悟もありや梅の茶
梅さく や何れ降るも 其を其
うめ咲き 似合ぬ 娘ハあけり
嘆のあは 枝先 ちむ 梅のむ
家まとも 藪の海 ちや 雲のむ
あゝ 梅のちんく ちんく 一重のむ
西目と二月の枝 ちうめのむ
梅さ 近 菊 ちんく ちんく
言さめき 日さかり ちうめのむ
さふく ちんく ちんく 梅のむ
おの 梅 何れ ちんく ちんく
月さうめ 何れ ちんく ちんく
教も 白ふ ちんく ちんく 梅のむ
梅り 其れ ちんく ちんく 梅のむ
うめ ちんく ちんく ちんく 梅のむ
梅子 身を ちんく ちんく 梅のむ

前川 空九 魯由 乙七 龍代 五龍 五龍 湖竹 意呂 茶里 茶里 梨木 芳美 左朗 士傑

山さくあま 梅さく
うめさ 月さ 梅り 茶 ちんく
注さ ちんく ちんく ちんく 梅のむ
ちんく 家ま ちんく ちんく 梅のむ
梅 梅さ ちんく ちんく 梅のむ
山 梅の ちんく ちんく 梅のむ
あゝ 梅 ちんく ちんく 梅のむ
あゝ ちんく ちんく ちんく 梅のむ
世の ちんく ちんく ちんく 梅のむ
梅 梅の ちんく ちんく 梅のむ
梅子 梅 ちんく ちんく 梅のむ
日さ 西 梅 ちんく ちんく 梅のむ
梅 ちんく ちんく ちんく 梅のむ
うめ ちんく ちんく ちんく 梅のむ
ぬく ちんく ちんく ちんく 梅のむ
星 梅 ちんく ちんく 梅のむ
梅の 月 ちんく ちんく 梅のむ
あゝ 梅 ちんく ちんく 梅のむ

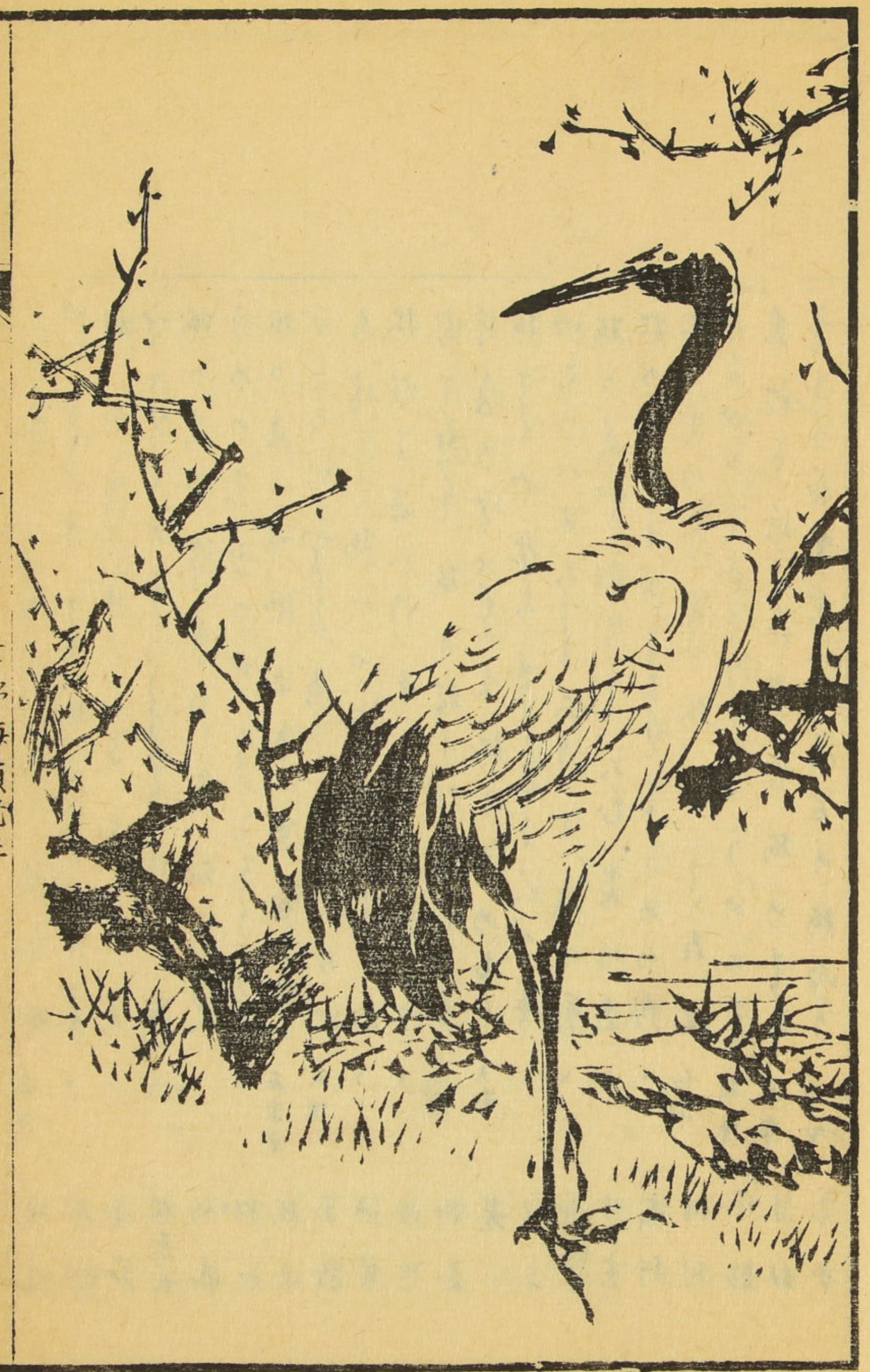
茶屋 社古 法候 茶の 梅さ 梅子 一茶 芳子 暮哉

神之卷 觀梅余興 二

申之卷

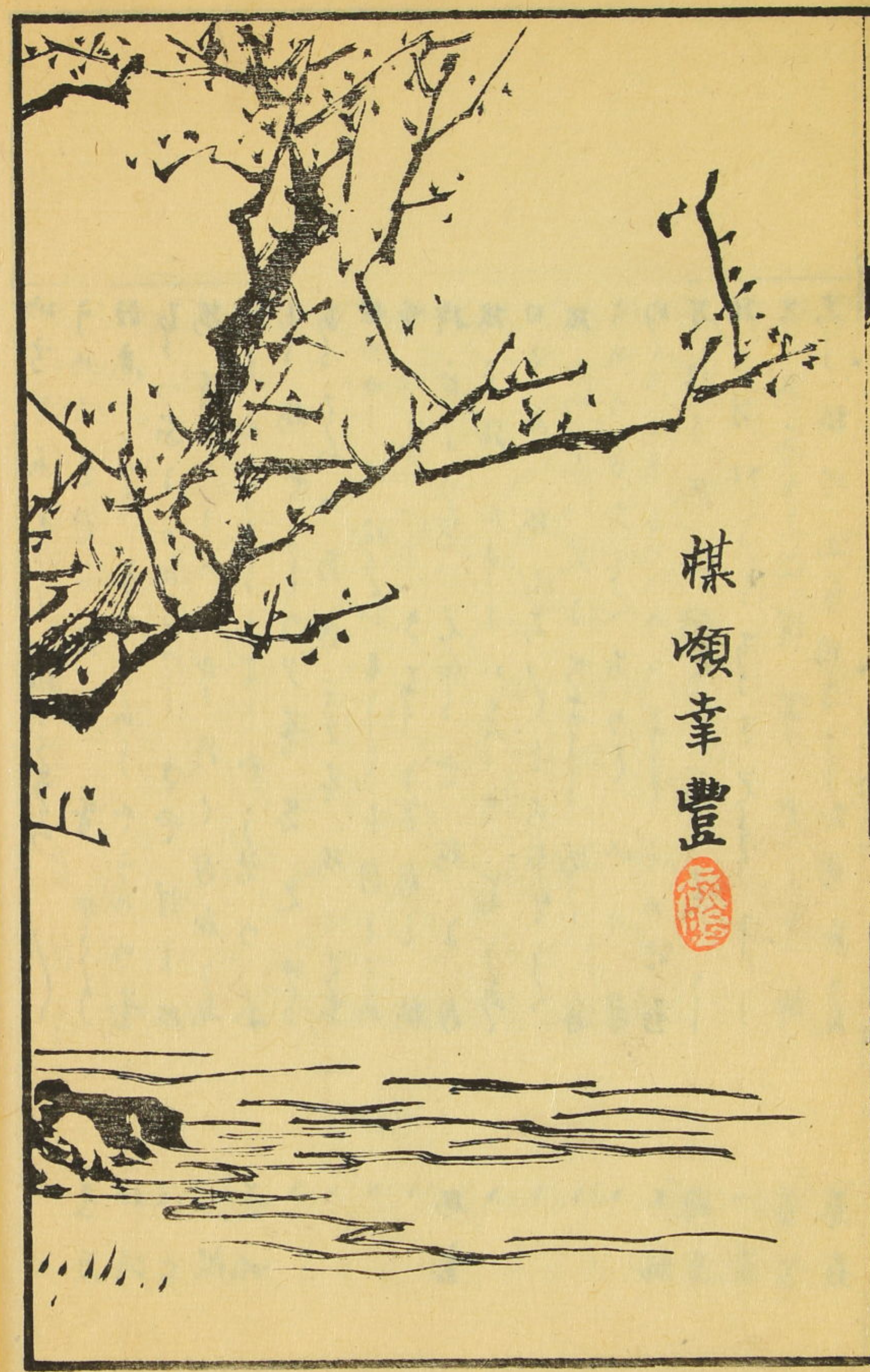
幸野梅嶺先生

二



申之卷

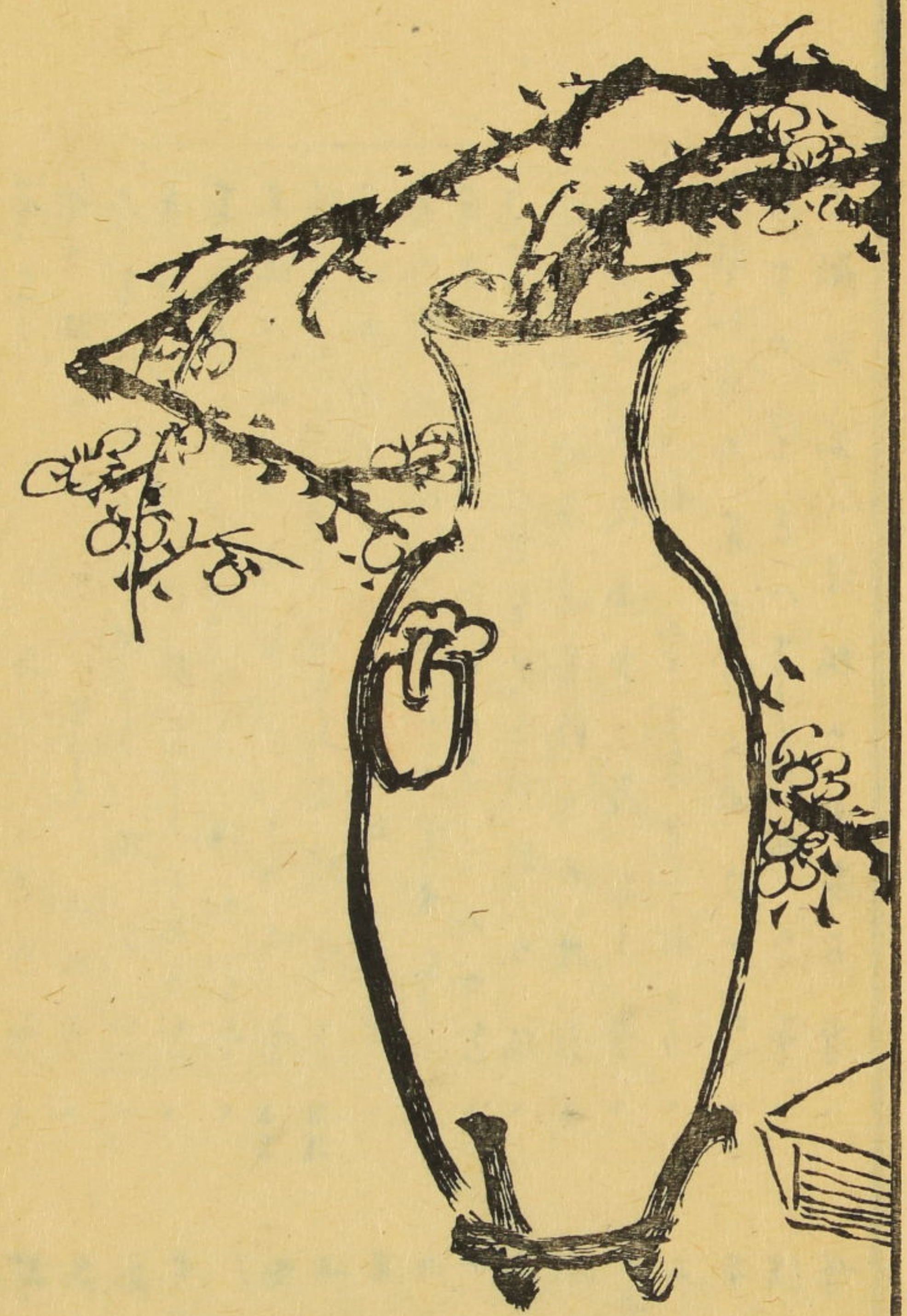
二



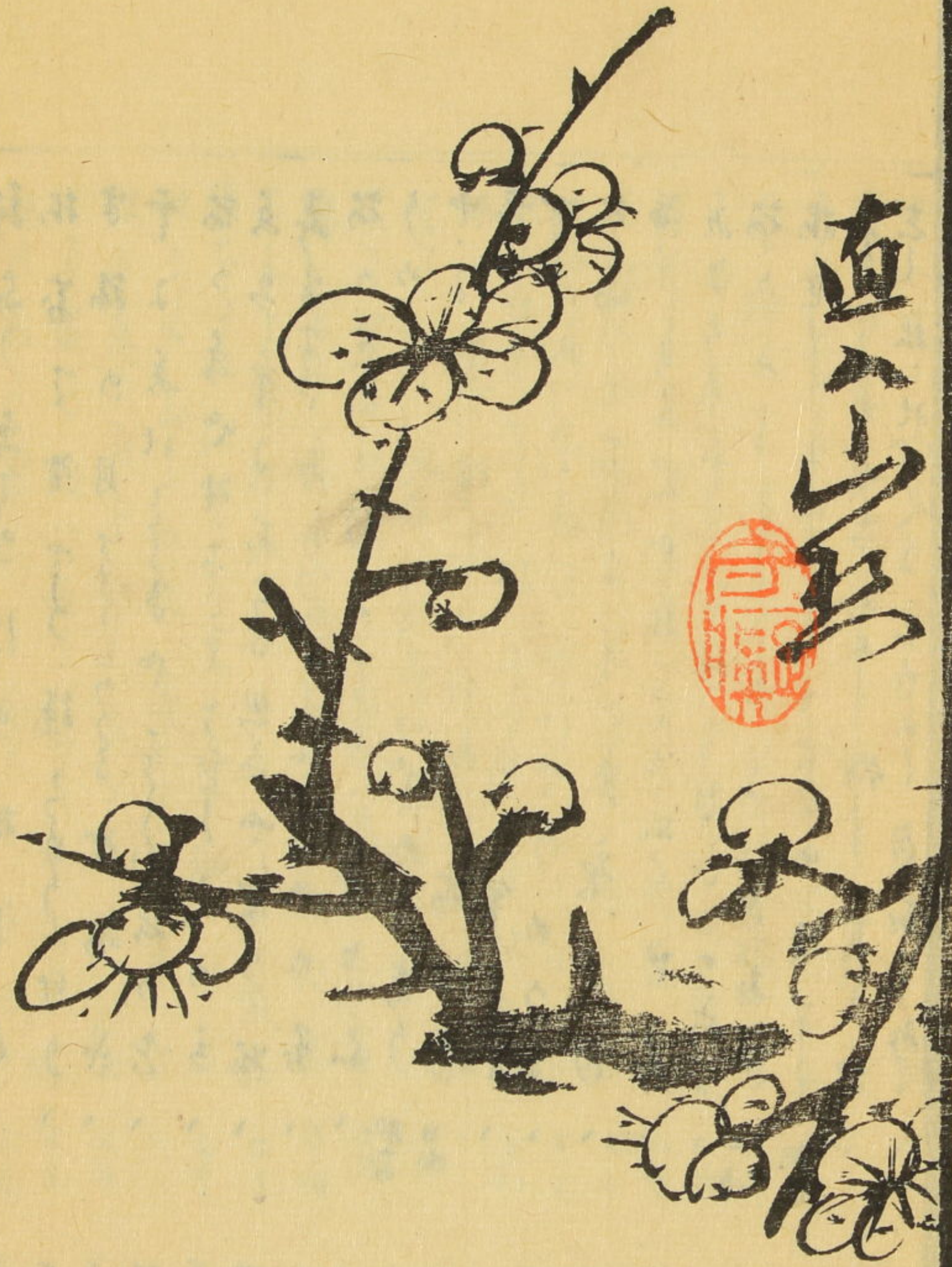
梅嶺幸豊



誰說江南十里春
相收之入瓦甍裡
多介古和桑者字



田近竹村先生



直人先生



風流
成畫



多行りもらんくうあり 梅 花 枝 々
 雪よまり月より 雪 梅 枝 々
 梅 花 枝 々 人の 梅 枝 々
 一と在ぬの梅 梅 枝 々
 花よりの梅 梅 枝 々
 水おりの月を 梅 枝 々
 子雪の 梅 枝 々
 梅 枝 々 梅 枝 々
 雪と梅 梅 枝 々
 山 梅 枝 々
 梅 枝 々
 初 梅 枝 々
 言 梅 枝 々
 友 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 雪の 梅 枝 々
 見 梅 枝 々
 昨 梅 枝 々

久海
 香海
 石海
 竹園
 耕島
 茶島
 旭島
 名竹
 黄竹
 上竹
 新雪
 馬年
 茶年
 法年
 高年
 梅年
 白年

汲ち何を 水ハ 梅 枝 々
 塵 梅 枝 々
 海 梅 枝 々
 庭 梅 枝 々
 新 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々
 梅 枝 々

吉柳
 旭柳
 新柳
 梅柳
 高柳
 法柳
 茶柳
 馬柳
 雪柳
 竹柳
 耕柳
 茶柳
 旭柳
 名柳
 黄柳
 上柳
 新柳
 馬柳
 茶柳
 法柳
 高柳
 梅柳
 白柳

月の瀨記行坤の巻終

法月法海空梅一以差
 香風芳々曉々添
 分助記得里會中句花
 別張惟所免尖

擇筆新録

源美契縁師

吾師不識庵宗匠游于月瀨腹得梅花之清氣而歸今
讀其紀行句々吐香愈出愈奇

明治丁亥初冬

門人

自閑山田智謹識

海のありを慕ひ其の月の瀨に遊んども信楽のさくらを乞ひ
て如梅の花一枝を携へて其をみるに帰せられし時余は
其梅香の清きを懐きて今も此紀行を
讀まば清き香を生かすは月日の清き梅林
にあらずのありしを懐きて是の一書を讀み余白の懐きし其の
其門下より遊んで出づる也

明治廿一年二月三日 印刷
全 年 全 月 全 日 出 版

岐阜縣士族

上田肇

發行兼
著述者

下京區第十五組祇園南側町
二百三十番戸寄苗

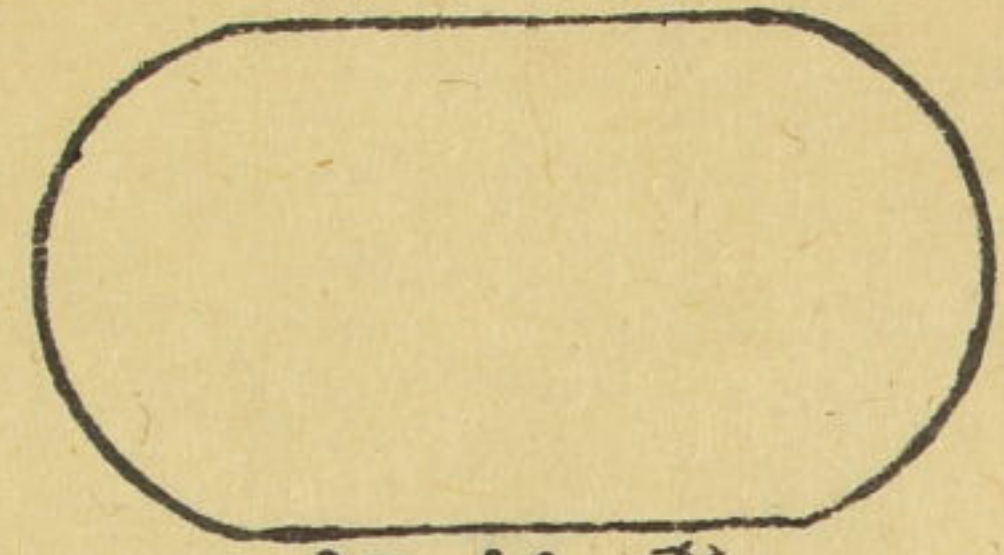
京都府平民

辻本文四郎

印刷者

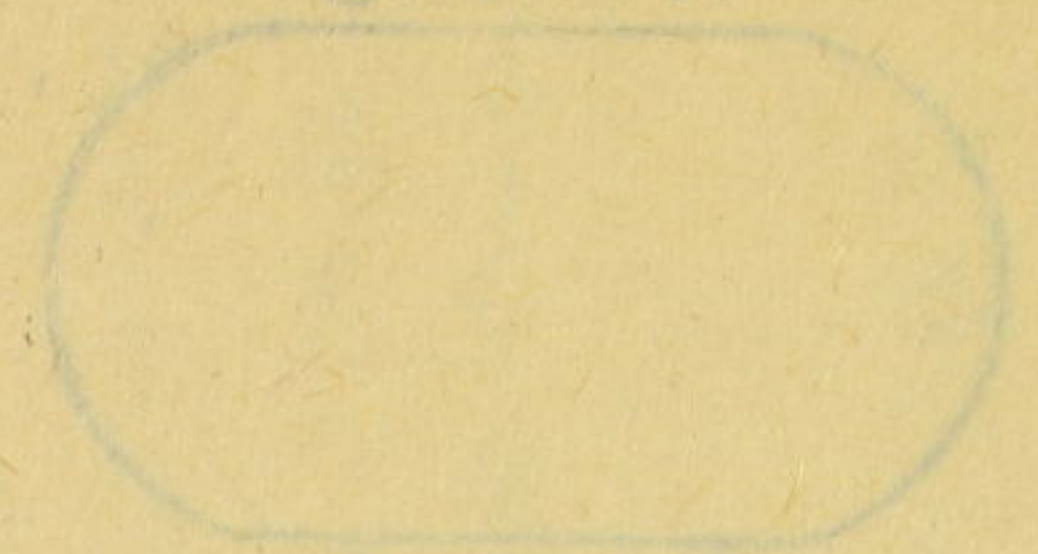
下京區第五組中之町
三十二番戸

著述兼



發行證

卷五



第廿五

吐瀉

本海秋平丸

長本大

土田

丸

全

出

除

